

戦隊ファンの僕の行方
不明の親友が艦これの
世界に居た事を超絶巨
艦の艦娘にTS転生して
知りました

マガガマオウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の孤独な男が死んだ。

そして、彼はとある特撮艦娘として蘇えりそして別の世界に居た友人と再会する。

目次

死せる人と目覚める艦娘って僕ですね。

1

艦これ世界の現実にはシビアでした

8

艦娘として生きる意味と覚悟

18

海原に轟く

23

死せる人と目覚める艦娘って僕ですな。

輪廻転生、元は仏教やヒンドゥー教などの宗教に置ける魂の概念なのである。

転生とは、生あるものが死後に生まれ変わり再び肉体を得る事の総称だ。

そして、転生にも様々なタイプがある、神様が要因となり転生させてもら神様転生、人ではなく魔物や亜人種に転生する人外転生、突発的な出来事で本人の知覚外で転生する偶発転生、そして性別が逆転した状態で転生するTS転生である。

『今の自分に起きてるのはどのタイプだろうか?』

彼いや彼女は、死の寸前までの記憶はある。

何故なら、さつきまで彼女は趣味の模型作りの為の資材の買いに行つた帰りだった、その帰路の途中で大型トラックが車道を外れ自分の目の前に迫っていた所までは思い出せるだが、その先が思い出せない。

いや、覚えてないのでは無く、知らないのだろう。

『あの分なら、即死だったのかな? まあ、死んじやつたものは仕方ないか。』

存外、余りにした様子はない。

彼女の生前に両親は居なかった。

生前は男性であった彼が幼い頃に二人揃って他界したらしい。

それ以来、祖父母に育てられていたが、彼が中学に入学した頃に祖母が持病で悪化して先立ち、祖父も高校を卒業する頃に祖母の後を追った。

更に彼が社会人になる頃、中学の頃から親しくしていた友人が行方不明になる。

それからは、元々内向的な性格が強くなり、人と交わるのを極端に避けるようになった。

収入は、祖父母が残してくれた遺産とP C関連の知識が豊富なのもあって、在宅でも彼一人程度なら問題無く暮らしていけるだけの金額は確保していた。

更に、好きが高じたのかプラモなどの模型加工技術もあり、そちらの方のコンテストでの入賞賞金なども彼の生活を支えていた。

そして彼は、無類の戦隊ファンでもあった成人してからも視聴を続けていたし、無論変身アイテムから限定アイテムに至るまでを網羅していた。

模型工作も、元を辿ればミニプラなどの食玩キットを加工するために身に付けたようなものである。

その中で、彼がもつとも手を掛けて作ったキットは、轟轟戦隊ボウケンジャーに登場するゴーゴーボイジャーであった。

そして、そんな彼は：彼女になって、造船所にも見える場所に立っていた。

近くには、男性が一人と女性が一人あと周りに小人が多数。

「明石、これ成功なのか?」

「はい…いえ、正直…まだよく判りませんが恐らく成功したかと…。」

辺りを見回しながら様子を伺っていた彼女の耳に永らく聞いていなかった声が聞こえる。

「べに?」

「え?」

男性の声が、行方不明になった親友の高丘紅介に似ていた為に愛称を呟く。

「なんで、君がそのあだ名を…?」

「!べに…べになの?!!」

「!まさか、クロ…!クロなのか?!!」

「うん!いや…厳密には、伊能玄斗だった誰か…かな?」

紅介が、玄斗だけが使っていた愛称を呟く目の前の女性に問いかけると目の前の女性、玄斗だった彼女がその声に答える。

「クロであつた誰か?…まさか!」

「うん…。僕…死んじやつたみたい。」

「なんで…なんでだよ…!」

「仕方ないよ、そう云う運命だったんだ…。」

「でも!」

玄斗の人生を思い出し、彼だけに訪れ続けた不幸に憤る。

そんな、紅介を落ち着かせる為に話題を逸らした。

「それより、ベには如何して此処に?」

「お、俺か…俺は…。クロ、艦隊これくしょんってゲームを知ってるか?」

「うん、名前だけはね。」

「そのゲームをプレイしている時にさ、何処からは分らないけど声が聞こえたんだよ。」

「声?」

「ああ、その後すぐに眠気が襲ってきて目が覚めたら、この鎮守府に居たんだ。」

「…。」

「何言ってるか、分からないよな…俺も、ここに来たばかりの頃はそうだった。」

「うん。正直、分からない。」

「だよな…。」

「でも、元氣だったならそれでいいや。」

「クロ…!」

久しぶりに再会できた二人。

その形は予期できぬものだったがそれでも再び巡り合えたのだ。

そんな、二人の間に流れる空気に水を差す様に言葉を掛ける者が一人。

「あの…そろそろ、宜しいでしょうか？」

「おわ！」

「あう！」

「えつと…ごめんなさい。話を先に進めても？」

「ああ、うん。よろしく頼む…明石。」

「よろしくお願いします…。」

明石と呼ばれたピンクの髪の女性が彼女に語り掛ける。

「ええつと…先ずは、はじめまして私は明石と言います。この鎮守府で、工作艦として工廠の管理などを任されています。」

「はあ、はじめまして…。」

「それで、私は貴女を何と呼べば良いですか？」

「へっ！ああ、ちよつと待つて下さい。今、確認します。」

急いで、今の自分の名称を確認しようとする。

「焦らなくても、大丈夫ですよ。」

「あつた！えつと…ゴーゴーボイジャー?!」

「ゴーボーイジャーですか…聞いた事が無い艦名ですね。ねえ、提督〜！」

驚愕に染まった表情した上司に驚き語尾が上がる。

「うそ…だろ…！」

「本当…みたい…だよ。」

「ゴーボーイジャーって、あのゴーボーイジャーか?!」

「うん。その、ゴーボーイジャーで合ってるみたい…。」

二人で通じる内容なのだろう、互いの認識した艦船が合っているかを確かめる。

「ええ…あの、そんなに凄い船なんですか？」

「ある意味な…。」

「あはは…あの、こっちで時速800km/hってどれ位のスピードですか？」

「えっ！ええつと…約450ノットですけど…。」

「それが、おそらくですけど、私の最高速度です。」

「へ…？」

「あくあ、多分なんだが火力も大和並だと思っぞ…。」

「…実在して良いんですか？そんな船…。」

「実在はしてませんよ…。」

「…それは、如何いう？」

「私はそもそも、空想の中に居る戦艦なんです。」

彼女の口から放たれた言葉を明石は上手く受け取る事が出来なかった。

何の因果か、男から女となり行方の判らなくなつた友人と再会した一人の艦娘はこれよりどんな航路を進むのだろうか、それは誰にも分らない。

ただ一つ言えるとすれば、これは序章に過ぎないのかもしれない。

艦これ世界の現実にはシビアでした

僕……ボーイジャーが艦隊これくしょんの世界に来てから、早くも数週間が経とうとしている。

最初の頃は演習場？みたいな所で色々な訓練を受けていた、けどもそもそもが空想の産物がモデルの僕だから……結果は、察してくれるかな。

「……あの提督さん？」

「……なんだ明石？」

「その……一応、戦艦の艦砲射撃訓練用の的を用意したつもりなんですけど……。」

「うむ……。」

僕の後ろで、付き添いの紅と明石さんが啞然としている。

無理ないよ……だって、標的の的を貫通するどころか溶かしてしまってるんだから。

ゴーボーイジャーの主砲ボーイジャーキャノンは、劇中で見る限りレーザー砲だったしやっぱりと言うか何というか、僕の主砲からもレーザーが照射されてしまった。

しかも、威力を押さえてもそこそこの破壊力があって……そりゃ、一度は凍結されるわけだよ。

それで、他にも何か機能は無いかと調べた結果……各ビークルに相当する艤装が着脱出来たり、そのまま航空機や輸送艦として使えたり、僕自身も水中で自由に活動出来たりした訳だ……まあ、水中に関しては飽く迄潜って動けるだけで戦闘は出来ないんだけど。

こうなつてくると運用をどうしようかと、紅と明石さんあと知的なメガネが似合う人……大淀さんだったけ？その三人で話し合っている最中だそうだ。

「あつーポイジャーおはようございますー！」

「うん、おはよう吹雪ちゃん。」

前の世界ではコミュ障で内向的だったけどこの世界に来てからは随分外向的になった気がする、鎮守府に所属してる艦娘さん達がフレンドリーだからかな？

「ポイジャーさん聞きましたか？」

「ん？何を？」

その内の一人で駆逐艦の吹雪ちゃん、セーラー服の似合う子で一人にいるとよく話しかけてくれる良く気の回る子だね、おっと！自分語りだけで吹雪ちゃんの話も聞いておかないと。

「最近、この鎮守府のまた資材が少なくなってるって話です。」

資材は今の僕も含めるすべての艦娘の糧とも呼べるものだしそれを使って艦娘は勿

論のこと装備も作られる、この鎮守府を動かしていく上で無くてはならない物だ、それが少なくているのは死活問題だと言わざる負えない。

待てよ？ 確か昨日にも……。

「それって昨日も睦月ちゃんたちが取りに行つてなかつたけ？」

「はい、その時も結構粘つて結構多く回収したはずなんですけど……。」

……紅の奴、さては建造に溶かしたな？ 後で取つちめに行くか。

僕の幼馴染は少し余裕ができると一つの事にのめり込んでしまうタイプの浪費家だ、普段は節制してけど一旦タガが外れるとあれよあれよつぎ込んでしまうのだ、そうなた時にストッパーになつてたのが僕だったんだけど……居なかつた仕方ないか、僕自身は丁度今はフリーの身だしね。

そうと決まれば善は急げだね！ いざ行かん執務室へ！

「紅！」

「うお！」

勢いよく戸を開けたからかな？ 紅が驚いた表情をしている。

なんで提督と呼ばないかって？ 僕は他の艦娘と違って愛称で呼ぶように言われてる、紅にはそつちの方が慣れてるからだそうだよ、艦娘になつてから僕と紅の関係は上司と部下な訳だけど基本的にはこれまで通りに接してくれつてお願いもとい命令され

ちやつたからね。

「何だよ玄かあく脅かすなよ……。」

「脅かすなよ、じゃないよ!」

だから偶に注意しに行くのも僕らからしたら日常風景だったりする。

「……何、怒ってるんだよ?」

心当たりがないって顔だね紅、じゃあはぐらかされるも面倒だから直球でいきますか……。

「聞いたよ紅、資材……無駄遣いしてるって!」

「うっ!それは……。」

おお!一気に顔色が変わったよ、相変わらず素直な性格だね君は……僕が生まれ変わる前で紅がこつちに世界に来る前までよく見た顔だよ、この顔の時は何かしらの理由がある時だったかな?

「一応、使用した用途と理由を聞こうか?」

訳も聞かずに責めるのもなんだから言い訳位させてあげよう、但しそれで留飲を下げてあげるつもりも無いけどね。

「……この鎮守府が戦力不足で困ってる話はしたよな。」

「うん、現状の戦力だと突破が難しい海域があるって話だよな。」

僕が来る前この鎮守府には重巡以上の戦力が居なかったと聞いていたし、それが要因で戦艦級の建造が急務だったのも着任の時に明石さんから教えてもらっていた。

「そうだ。」

「でもさ、それって僕が建造されるまでの話だったと思っただけ？」

そう今は僕が居るだから少なくとも戦艦級の艦娘については急ぐ必要がなくなったらしい、だから何故今の資材の減りが激しいのか聞きたいんだよ。

「いや……戦力は今でも不足してる、確かに玄が来てくれて幾分かはましになったけどな……。」

紅……君は相変わらず作り笑いが下手だね、でも現状でまだ戦力は足りてないって考えてみれば当然か……。

確かに僕は普通の戦艦から見てもオーバースペース、だけどたった数で見れば戦艦が一隻増えただけで現存戦力が強化されたわけじゃない、僕を中心に艦隊を編成するにしても随伴艦のも相応の戦力がないと運用は難しいよね……。

「現在の鎮守府に在籍してる艦娘の練度はこれ以上は上げられない、だから装備を揃えようと開発に資材を回してるんだが……。」

「結果は芳しくないって。」

「ああ……。」

やれる事やったその上での現状か……うん、言いたい事あるけど今のは飲み込んでおくとしますか。

「事情は分かつたよ、もうこれ以上は言及しない。」

「ありがとう……ごめんな玄、着任したばかりお前にこんなこと言わせて。」

ああもう、そんな申し訳なさそうな目で見ないでよ……内情も知らずに突撃した僕が悪いんだから。

「気にしないでよ……でもさ紅、そろそろ睦月ちゃんたちを休ませてあげないとじゃない？」

僕が来る前もほぼ毎日資料を集めていたそうだし、この前も余程疲れていたみたいで食堂の机で寝ていたのを見る。

「そっか、そうだよな……でもこれ以上戦果が挙げられないと鎮守府が解体されるかもしれないしなあ……。」

相当切羽詰まった内訳があつたんだね、考え過ぎて眉間に皺が寄ってるよ……仕方ないことは僕の出番かな。

「ねえ紅。」

「ん？何だ玄？」

懐かしいなこのやり取り……向こうでも勉強で煮詰まった時とか休憩しようと声を

掛けるといつもこんな風に返されたっけ、何でもない事だった筈なのにちよつと会えないと懐かしく思えるんだね。

「僕に一日だけ工廠を使わせてくれないかな？」

「工廠？何か作るのか？」

工廠と聞いてツールの制作目的だと気付いてくれるとは、やっぱり付き合いが長いと意思疎通が出来ていいね。

「うん！今の紅たちにとつて一番役立つ物をね！」

作るとしたらやっぱりあれだよ、さてと必要な素材はあるかな？つと考えながら工廠に向かったのは、紅と話をしたすぐ後だった。

僕がこの鎮守府の工廠に入るのは実は二回目だったりする、一回目は建造された時で二回目も今だ……。

「提督から話は聞いてます。どうぞお好きにお使いください。」

「ありがとうございます明石さん、すいません無理を言つて。」

「いえいえ最近煮詰まつてまして、気分を変えようかと思つてましたので丁度良かったです。」

明石さんに迎えられる工廠の兵装開発を行うスペースに通される、紅が話を付けてくれたらしい最初は断られるなつて思つたけどそんな事は無く意外と快く使わせてくれた、

それじゃ始めますか！

転生した時、僕の脳内にはサージエス財団の制作した武器のデータが入っていた、所謂転生特典と云う物だろうね、その中に今回の目的の装備のデータもあつたんだ、取り敢えず素材はこつちでも十分揃えられたから後は精製し加工して組み立てるだけ、似たような事は前の世界でもやったから要領は分かつてるしそんなに難しくないよ、あつと言う間に完成だ。

「出来た……！」

「これは……銃？」

ずつと観察してた明石さんが横から完成した物を見て不思議そうにそう呟いた。

ふっふっふ、確かに一見すれば特殊な形状の銃だと思うでしょうけど違うのです！

「ちよつと違います。これはサガスナイパー、探し物の時に役立つアイテムです！」

僕が作りたかつた物それは、ボウケンシルバーのメインウエポン！サガスナイパー！知って通りこれは接近戦モードのサガスピアーと射撃戦モードのサガスナイパーそして高性能探知機のサガスモードを有する多目的ツールなんだ、更に言えばサガスモードの探査範囲は広範囲でこれがあれば資材集めもグツと楽になる筈だよ！

「おーい、調子はどうだつて！それっサガスナイパーか?！」

「うん！凄いでしよう！見た目だけじゃなくて機能も完全再現したよ！」

仕事の合間に様子を見に来た紅が、完成したサガスナイパーを見て驚いている。

ふっふん！どうだい僕の工作能力は………って言いいたけど、やつぱり設計図なしじゃ完成は出来なかったからね………牧野博士はすごいや。

「凄いいじゃないか！流石は玄だ、手先の器用さは転生しても健在だな。」

「まだ試作段階だし、実用化するにはデータが欲しいけどね。」

実践データは採っておきたいよね、こう言ったらなんだけど僕はこの類の物を作るのは素人だから、出来たばかりのこれをいきなり実戦で使うのは不安だよ。

「分かった直ぐに試験艦隊を編成する、ちよつと待つてくれ！」

「あつ！あと少しだけ我が儘いかな紅？」

「………何だよ、行ってみる。」

「その試験艦隊に、僕も組み込んでほしいんだダメかな？」

急ぎ足で執務室に戻ろうとする紅を呼び止め、要望を伝えてみる。

「やつぱりさ、最後まで責任持ちたいじゃない………自分が作った物なら尚更。」

「………分かった、考えてみるよ。」

「うん、ありがとう。」

さてとこれで少しは役に立てたかな？………いや、これからだねこれから。

かくして一人の艦娘はこの世界で己の役割を見出そうとしていた、その航路の先には何があるのかどんなログを綴るのかは本人にも未だ見えてはいない。

艦娘として生きる意味と覚悟

ベニと明石さん大淀さんの三人との話し合いはとんとん拍子に進んで、実験艦隊で腕慣らしの代わりになるだろうと許可が下りた。

まあ、僕もそこまで鈍くわないし手に余る戦力だと認識されていた事は理解してるよ、だからこそいきなり実戦に投入する事は避けられていたんだし。

けどさあ、ここまで待ち惚けくらってその間ずっと、やった事と言えば訓練と座学の講習だけでそれ以外だと食べて寝るだけって、完全にお荷物だよ僕？

いつかは活躍できるって言っても、それが何時になるか分からないんじゃないや準備している意味も薄れるしね。

自発的に動かないと一生営倉の隅で埃を被る事になりそうだったし、これは自分の存在意義を懸けた勝負だと思っただ方がいいな。

「そう言う訳で……作戦会議をしましょう！」

「はあ……。」

僕の作った新装備ことサガスナイパーの実戦試験の為に編成されたメンバーを会議室に集め、今度の出撃の作戦会議に託けた打ち合わせを始める、メンバーは吹雪ちゃん

を始めに睦月ちゃん如月ちゃん天竜さんと僕ゴーゴーボーイジャーことボーイジャー、僕の速度を生かせる編成にしたって聞いてたから駆逐艦と軽巡が主な編成らしいね。

「ノリが悪いですね皆さん？いいですか、これは僕がこの鎮守府所属艦隊の戦力となれるかなれないかを左右する大事な作戦なんです！」

ここに来てからまだ出撃の号が出てないからね、このまま無用の長物として放置される位なら自分から進んで主張しないと、折角艦娘っていう戦う兵器として生まれ変わったからには無駄飯ぐらいのままでは居たくないのだよ。

「どうしましよ天竜さん？」

「どうしましようって言うっても、俺達は提督から話が来てるわけだし……。」

聞こえてるよ吹雪ちゃん天竜さん……こう見えても空想の世界の高性能艦、探知機能も高水準なのだよ……。

「……やつぱり、ベニに何か言われてるんですね？」

「はっ！」

「あら〜天竜ちゃん、ボージャーさんの前で内緒話は厳禁って言われてたじゃない。」

二人とも、しまった！って顔してるね〜まあ、大体何を言われたかは察しがつくけど……大方、本格的な戦闘は避ける的な注文だろうな。

「でもでも！提督さんもボーイジャーさんが心配だからお願いし来たんですし……。」

「そうよく正直、あんなに大事して貰ってるボーイジャーさんが羨ましいわね。」

睦月ちゃんたちの言い分も分からなくはないよ、僕があつちの世界から転生した唯一の知り合いだから大事にしたい気持ちも分かるけど、僕はこの数か月で断片的でも知ってしまった……この世界が置かれてる現状を。

転生する前の僕は知らなかった、日々の生活があんなに満たされていた事が当たり前じゃないって、自分の殻から一步も踏み出せなかった自分には想像もつかなかったんだ……この世界の人々は今も存続の危機の晒されている、こんなの見過ごせる筈ないじゃないか！

「もう……対岸の火事じゃないんだ、迫りくる火の粉なんだよ。」

「ボーイジャーさん……。」

僕も覚悟を決めてるよ吹雪ちゃん、相手が例えどんな姿で現れても僕は戦える。

「……ああもう！分かったよ、俺達もこのまま使える戦力を錆び付かせる訳にもいかねえしな。」

「ふふふ天竜ちゃんたら、でも確かにボーイジャーさん位の高性能な艦娘を遊ばせてたら勿体ないわね。」

良かった天竜さん達からの了解も得られた、後は睦月ちゃんたちだけだね。

「う〜んいいのかな?」

睦月ちゃんはまだ悩んでるみたい、彼女達からすれば上官の命令を無視しろって言われてる様なものだもんね。

「あら? 良いじゃない本人がやる気出してらんだし、それとも睦月ちゃんは反対?」

如月ちゃん……分かってくれたんだ、後はもう睦月ちゃんだけだね。

「お願いします! 僕に艦娘として生まれた意義を果たさせて……。」

こうなつたら手段は択ばないよ、やれと言われたら土下座だつて出来る。

「ぼ、ボイジャーさん?! そんな、頭を上げてください?! 分かりました、分かりましたから!」

勝った! 何だか周りの視線が痛いけど、この一瞬はこの勝利を噛みしめよう……うん、土下座したまま言つても締まらないね。

「と、兎に角! 若し戦闘になつても極力避けるのは無しの方角で、よろしくお願いします!」

う〜む……何だか場の空気が一気に緩んだような気がする、だけど今回は飽く迄武装試験の為の作戦だから……たまたま敵勢艦隊と遭遇して戦闘状態になつても自己防衛の為に止む無しの行動で命令違反じゃないよね?

「おう任せろ! 若しもの時はな。」

「そうよ、若しもの時は任せてね。」

天竜さん達……僕が言いたい意味を理解してくれたんですね……お二人とも悪い顔してますよ？

「何だか凄い事に成っちゃったね吹雪ちゃん……。」

「うん……まあでも、ボイジャーさんが決めた事なら反対は出来ないかな。」

「そうね、何だかんだでこの鎮守府の中での最高戦力の意見だもね。」

この時、生まれはしたがまだ世間に認知されていなかった規格外の性能を持つ一人の艦娘が、自分の存在意義を示すため起こした行動はその後の世の流れを大きく変えた……だがその事を語るのはまだまだ先になるだろう、何故なら彼女は進む航路は誰も知らなかった世界を切り拓いていくのだから。

海原に轟く

「それじゃあ、くれぐれも安全に頼むぞ皆。」

僕の初進水の日、僕専用で作られたドックに集められた艦隊メンバーが集められ最後の念押しをして来た。

「ああ、分かっているよ安心してくれって！なあ皆？」

「ええ、心配には及びませんよ提督。」

旗艦の天竜さんとそれに同調する龍田さん、二人はもう既に僕の計画の協力者になって貰ったのだ、だから何が起きても仕方なかった事にして貰う予定なのだよべ提督。

「……本当に頼むぞ、クロに何かあつたらタダじゃすまないぞ……俺が。」

「あ、あははあく承知してます〜す。」

「にやしい……。」

駆逐艦の子たちは何やら心持ち穏やかじゃない、何処か歯に何か挟まった時の表情を浮かべているけど、それは飲み込んで貰おう。

「頼んだからな？クロ、お前も無茶だけはしないでくれよ……帰りを待ってるからな。」

「了解だよ、今の僕が出来る限りのところで頑張ってるからね。」

一頻り艦隊メンバーを、見回した念を押しした提督が最後に僕の前に立ち目を合わせて語り掛ける、心配してくれてる事は表情からでも伝わって来るけど僕も引けないから、眉根を下げて瞼を山なりに持ち上げて笑みを見せ聞き分けのいい風を装う事にした。

それから、僕以外のメンバーは其々の出撃口へ移動してココには僕だけになる、それじゃあ行こうか僕の初仕事へ。

『他艦鎮守府より発艦しました、ボイジャーさん続いて下さい。』

「了解です。提督、コールをお願いします。」

『承知した、ボイジャー……アンドック。』

ドッグ内のスピーカーから流れる大淀さんの声で、他の皆が出た事を知らされそれに続く為提督に発進コールを掛けてもらう。

発進のコールが聞き届けられた事で、僕の艦装に力が宿り足のクローラが前進して海へと進んでいき、海の中から海面に浮上した。

「みんなお待ちせ。」

「おう！つてか、ボイジャーの発艦ってそうやって進行するんだな。」

「なんだか面倒ね。」

海面から浮かんできた僕を天竜さん達が出迎えてくれた、二人が僕の発信のプロセスの長さに戸惑っているようだけど、僕みたいな超兵器の扱いなってこれ位慎重な方が良

いと思う。

「ボイジャーさんって、空と地中意外だったら何処でも対応してるんですよ？」

「うん、そうだよ。」

私が海の中から出て来てから静かだった駆逐艦の子たちの中で、吹雪ちゃんからそう聞かれて僕は事も無げに肯定する。

ゴーゴーボイジャーと言うピークルは、作中を見る限りで海中海面地上と行動できる範囲が広がった、その特徴が僕自身にも反映されていて上陸作戦でもそれなりに動ける一種の万能艦となっていた。

「速度が出せて、火力も高く、航空戦にも対応、おまけに活動場所にも制限がない……額面通りに受け取ればとんでもない艦船だな。」

「それが、僕の下になった船の設定だからね。」

「ヒット！」

海の上を一行になって前進しながら、サガスナイパーのレーダーを海面に近づけて資源を探している中で天龍さんの言葉に応答していると早速資源のある方向を見つけた。

「アッチの方角だね、行こう。」

「ああ。」

反応があった方向に舵を取って進み、反応が強い場所を探して潜る、それを何回か繰

り返した頃だった。

「此方、ジイ……鎮守府、第二艦隊所属矢矧……応援願……強襲を受けている！」
「っ！救難要請！」

僕の好感度センサーが友軍信号を捉えたのだ、他の皆が急に叫んだ僕の様子に驚いていたけど僕としてはそれどころじゃない。

「救難要請って何だよ？俺のリーダーには何も反応はないぞ、龍田はどうだ？」

「私にも、付近にそれらしい反応はないけど？」

そういう二人の表情から？偽りは感じられない、という事はこれが聞こえてるのは僕だけって事だ……僕が拾える範囲で別の鎮守府に所属している艦隊が攻撃を受けている。

「コマンダー！行って！」

僕の頭部に装備されていたヘッドギアが外れ、独立して偵察機に変形させると通常よりも広い範囲に探査を掛ける。

「何処？……何処に居るの？……居た！東南に約500km、味方艦軽巡2駆逐3軽空母1確認。」

ゴーゴービークルNO.14コマンダーは管制機である、それが故ボイジャーを構成する五つのビークルの中でも突出して戦域把握能力を持ち、艦娘となった現在は偵察機

としても優秀な艦装となっている、そのコマンダーが送った情報から大体の位置と艦隊構成を知る事が出来た。

「敵方に戦艦2空母1重巡1駆逐2……僕の足なら行けるか……サガスナイパー渡しておくから、ちよつと艦隊から外れるね。」

言うが早いか一言言い終えると即座に艦隊を離れてしまうボイジャー、その背はみるみる内に離れ小さくなる。

「あつーちよ……つと待てつて、行っちゃった。」

「あらあら、話には聞いてたけど本当に早いわね。」

「もうあんなに遠くに……。」

「あはは……私達じゃ追いつけないですわアレ。」

ボイジャーからサガスナイパーを渡され一瞬なにを言われたか理解できなかった竜が、その意味を理解して制止しようとする頃には、自分達よりも遥かに早く海の上を走る彼女の影を見届ける事しか出来なかった、そして他の艦娘も同様にずっと先に行ってしまったボイジャーの姿を呆然と見届ける。

「……追いかけるぞ。」

「はいはい、了解よ天龍ちゃん。」

「追いつけますかね？」

「さあ、でも追い駆けないよりも良いんじゃないかしら？」

「私もそう思う。」

天龍の呼び掛けで全員がボイジャーの向かった方角へ進路を取り、その後を追って航行を始めた。

「見つけた、目視で確認できる範囲での被害は……軽巡に大破1中破1駆逐大破2小破1軽空母中破、ギリギリ持ち堪えてるけど……ファイター行つて。」

先を急ぐボイジャーは距離を縮めつつより詳細な情報を更新し、到着を待たずに主砲の一对を分離して戦闘攻撃機として先行させる。

ゴーゴビークルNo.16ファイター、ボイジャーの構成パーツとしては第一第二砲塔を構成するビークルであり分離した場合は戦闘機として活躍する、元々が主砲であるため戦闘機の単体火力としてはオーバースペックなハイエンド機であり並の艦載機を遥かの凌駕しているのだ。

「アトヒトオシデ沈メラレソウダナ。」

「アア追加砲撃ヲ加エルマデモナイ。」

自分達の勝利に大手を掛けたと確信して横柄な態度を見せる戦艦ル級の二体、その表情を傲慢に歪め完全な勝利を得る前から悦に入る。

「フ？」

「ナニカ アツタカ ヲ級？」

そんな上機嫌な時に空母ヲ級が不審な事が起きた様な表情を見せ、ル級一体が視線を送り何が起きたか聞きだそうとする。

「周囲ヲ見張ラセテイタ偵察ノ数機ノ反応ガキエタ。」

「ナニ？ 敵カ シカシ周辺海域ハ仲間ガ封鎖シテルハズ……敵ノ姿ハ？」

自分達の知らぬ間に受けた奇襲と思わぬ事態に冷静な判断を下す為より詳細な情報を聞き出すとするが。

「ワカラナイ一瞬デ消エタ イツノマニ近ツカレテドコカラ攻撃サレタノカモワカラナイ。」

「ナンダト！」

「オイ！海中カラオカシナ反応ガ迫ツテキテイルゾ！」

ヲ級が正体不明の敵機から攻撃に混乱していた時、重巡り級が焦った様に揉める仲間
に警告を発し、敵側の混乱は相対する艦娘達にも伝播する。

「なんや、慌ててるな敵さん。」

「不測の事態が起きてるのか？ 何にしてもこの状況は好機だ、撤退の準備を！」

軽空母龍驤が攻勢の変化から敵の焦りを察し、旗艦である軽巡洋艦矢矧も状況の変化を感じ取りそれを好機と見て撤退を始める。

「ナツ！逃ガスカ 後方艦隊止めロ！」

海域から退こうとする艦隊の動きを深海側も察知し、控えさせていたもう一つの艦隊を動かし退路を塞ぐ。

「くっ！後方にも敵が潜んでいたか、仕方ない大破している艦娘を中心に損害が警備の者を前方と後方に、私は前に出るぞ突貫する！」

「矢矧何を！」

大破した駆逐艦二隻を囲うように陣形を組むが、自身が大破しているにも構わず轟沈覚悟で前進する。

「奴ヲ 沈ムノガ怖クナイノカ？マアイイ 望ミ通り全員沈メテヤル！艦隊 敵二向ケテ砲撃開始！」

前後から挟撃を受けながらも活路を求め全速力で走り向ける、砲撃を避け雷撃を逸らし決死の撤退航路を切り開く。

「当タラン ナゼダ？」

「死ヲ 覚悟シタ者ノ強サト言ウモノカ ダガソウイツマデモツマイ。」

実際、矢矧は自分が沈んでも残りの仲間がたとえ逃がすと覚悟を決めていた、その殺気にも似た気迫が砲弾を逸らし先行する魚雷を逸らさせたかは分からないが、彼女たちの進路から遠ざかっていた。

「ヤハリオカシイ 前ト後ロカラ投ゲ続ケテイルノニ一発モ命中シテナイナンテ。」

「確カニ 私達ノ砲撃モ的中シタ氣配ガナイ マルデ当タル直前デ打チ消サレテイルヨウナ。」

しかし、流石に激しい砲撃と雷撃の嵐を無傷で運だけで掻い潜るのは不自然、何某の介在が無ければ有り得ない、それが神の気まぐれか悪魔の仕業かこの戦場に誰かが介入している思わずにはいられない。

「ヲーイマ攻撃隊ガマトメテ消失シタ！」

「ナニ？ 偵察機ノ時ト同ジカヲ級？」

不審な状況に更なる不可思議が重なる、今度はヲ級が放った攻撃部隊が忽然と消失したのだ、ここ迄くると偶然で片づけるのは苦しい。

「可笑しい？」

「どうしたの矢矧？」

先を急ぐ矢矧も流石に事態の不審さには気付いた、さつきから魚雷の一本は疎か砲弾の一発も迫つてこない、そのうえ空母が居た筈なのに航空機の影すらないさつき迄とは状況が明らかに違った。

「阿賀野姉さん、私達が後退してから敵からの攻撃を受けた？」

「え？ そう言えば、ずっと必死だったから気付かなかったけど……。」

「言われてみれば、後方からも砲撃も雷撃も無いな?」

構えて突っ込んだ筈が一向に攻撃の音沙汰がないと言う違和感、敵が諦めたとも取れが状況は相手が有利、ここで引くとは思えない。

「何が……っ!」

「矢矧!」

降って沸いた懐疑的状况に思わず速度が緩み思考の深みに嵌まりかけた時、自分の目の前で大きな水柱が上がり、考える事に気を取られた矢矧は反応が遅れ妹の危機と感じた阿賀野が前に出る。

「……何も無い、何だったの?」

「姉さん!」

敵からの攻撃と違って庇って見たが次には平穏な水面が揺れるのみ、暫く待っても何も起きない事に肩の力が抜け掛けた時、また海中で何か爆ぜ水柱が上がる。

「これって、まさか誰かが水中で魚雷を誘爆させてる?」

「そんなん出来るんか? 潜水艦ならまだしも、この海域にはそれら艦娘がおる報告は聞いとらんけど。」

そもそもこの海域は彼女たちの所属する鎮守府の担当海域ではない、本来は紅介の着任地である鎮守府の担当なのだが戦力が不足している彼の艦隊ではカバーし切れず、世

話好きな彼女たちの司令官が代理で見回っていた。

だからこそ、この海域には彼女達しか居らず更に紅介の鎮守府にはこの状況を如何にか出来る戦力も期待できない為、少し遠いが自分達が所属する泊地に応戦を要請していたのだ。

「しかし、ではさつきの水柱は偶然上ったモノだと言うのか？アレは明らかに人為的な行動でなければ起こりえないモノだ。」

「それは……そうかも知れんね、なんやあの提督さんも戦力集まってきたんやな。」

状況は危機的、それでも樂觀視出来る余裕は生まれた、自分達を援護している艦娘が誰だかは知らないがきつと紅介の部下だろうと検討を付け帰還の進路に舵を切る。

その頃、海中ではボイジャーが孤軍奮闘していた。

「もう一発来るか！当てさせないよローダー！」

水の中でも活動できる彼女の両腕には、ローダーが分割されて装備されていた。

ゴーゴービークルN.O. 18ローダー、船体の全面下部を構成する巨大ロードローラー型ビークルだ、水陸両用な上に陸上で敵に向けて突撃しても活動し続けられる頑強さを持ち、腕に装備したら超大型ナックルとして使用可能である、実はさつきからこれで敵の魚雷を殴り飛ばし別の魚雷に当って誘爆させ続けているのだ。

「海の上はファイターとアツタカーに任せてるし、上の艦隊が逃げ切るまで凌げばいい

だけ、これならクロにはバレない筈だよな？退路を塞いでた敵は先に沈めたし。」

後方に控えていた敵戦力もボイジャーが到着した時に全船轟沈せしめ、今上空を守りは先に飛ばしたファイターと敵船を沈めた後に分離させたアタツカーの二機が固めていた。

ゴーゴービークルNo. 17アタツカー、攻撃爆撃機型のビークルであり第三第四砲塔を兼ねるビークルの為ファイター同様火力は高い。

敵航空機の迎撃は勿論、砲撃が当たる前に砲弾ごと消滅させる事すら造作もない、結果として砲撃はファイターとアタツカーが抑え雷撃はボイジャー本人が対処して海上の艦娘達には届かない、否届かせないのである。

「オイ後方ノ部隊 対象ガソツチニ行ツタ抑エロ！オイ 聞コエテイルノカオイ！」
「ドウシタ返答ガナイノカ？」

そうと知らない深海側は逃げ切れそうになるのを阻止しようと後方部隊に連絡を送るが、すでにボイジャーが全滅させた後だ返しがある筈もない。

「クソツ！ヤラレタカ 全船続ケ追撃スル。」

このまま応答が来るのを持ってはいられない、逃げた艦隊を追って全身を始める深海側の艦隊の前に海中から謎の影がせり上がる。

「君達には追わせないよ……僕が相手だ！」

海中から浮上した影ボイジャーが敵の前でそう言い放つと、空中で待機していたファイターとアツタカーが元の位置に戻り砲塔を旋回させ駆逐艦と重巡洋艦に狙いを付け撃ち放ち一撃のもと沈める。

「ナニ？タツタ一撃デ駆逐ト重巡ヲツ！」

「バカナ！駆逐艦ナラ分カルガ重巡モダト！」

ボイジャーは艦娘としては日が浅い、だがそれを補って余りある艦装のスペックと彼女の素質は一級のもの、それはこの戦闘の間に起きた一連の行動が示していた。

「僕は今回が初戦だ、だから君達で戦いの勝手を学ばせてもらうよ？拒否は受け付けない。」

そう言い来たボイジャーは全身の武装を解き放ち敵艦隊に向けて単艦で向かっていく……。

そして、ボイジャーの影からの助けを受けて撤退した味方艦隊の面々は、彼女を追って来た仲間たちと合流していた。

「つまり君のところの新入りがコッチに来ていて、私達の撤退の援護をしていたのでは？…………つと。」

「ああ、アイツの性能なら出来かねない……つたく、勝手に動きやがって。」

ボイジャーの自己判断での艦隊離脱はつきり言て命令違反だ、自分達と一緒に居る

時の戦闘なら仕方なくて済ませる事も出来るが勝手に離れた上で他で戦闘をしていた場合は懲罰の対象になる、それが例え救援目的であつてもである。

「しかし、その話が本当なら凄まじい話だな単艦なのだろうか？」

「はい……こつちで救援要請が来てるって言つてから直ぐの事だったので、ボイジャーさんなら多分……。」

大破して退避してきた若葉は眉唾な話に半信半疑で吹雪に尋ね、吹雪が何とも言えない顔で頷き事実を肯定する。

「そろそろだぞッ……何だこれは!？」

「嘘やろ……?」

「聞きしに勝るとはこの事か……。」

さつきまで自分たちがいた海域に到達した時、敵艦隊は大破状態の敵戦艦が一隻を残すのみとなり他は見る影もない。

「……やつぱりこうなつたか。」

「ある意味、予想出来た結果よね。」

「でも初戦でこれって……。」

その壊滅した敵艦隊とは対照的な傷一つない状態で、相対するボイジャーの姿を見た天龍達は予測の域を超えないがそれでも予想以上の戦果を見せた彼女の潜在能力に呆

気を取られていた。

そしてボイジャー本人は、瀕死の相手を前に今まさに止めを刺す直前と言った冷めた様子で砲塔の先に光が集まっていた。

「これで最後だね、ありがとう……君達のお陰で僕も匙加減を測れた、お礼は苦しまずに逝かせてあげる。」

「……バケモノメー！」

対敵は一瞬そこから撃破までは刹那の間、一刻を追う毎に味方は沈めれこに異常な性能を持つ正体不明艦にこれまでに無い恐怖を感じ、これから沈められる自分の責めてもの抵抗で悪態をつく。

「ボイジャーそこまでだー！」

「っ……天龍さん？」

攻撃を行おうとする直前で天龍が呼び掛けボイジャーの注意は逸れ、ボイジャーキヤノンの砲口は逸れ目標から光線は外れた。

「クツ！ 覚エテイロ 私ガオ前ヲ沈メテヤル！」

ボイジャーの一撃が外れた事で九死に一生を得たル級が、一瞬の隙を狙って捨て台詞を残し海中へ逃げその場にはボイジャー達のみが残される。

「逃げられた？ 追わなきゃ……。」

「待て、お前はこれ以上動くな。」

尚も逃げたル級を追いかけようとするボイジャーの前に天龍が進路を塞ぎ、周りも他の艦隊艦が囲んで身動きを封じられる。

「……分かったよ、これ以上我が儘したら皆が困るんだよね。」

「帰投する、悪いがアンタ達にも状況説明の為に付いてきてくれ入渠ドックは貸すから。」

「分かった、ついでに無線も貸してもらえるか所属泊地に連絡がしたい。」

あれだけ激しい戦闘の後にしては随分とあっさりとしたボイジャーを囲うように編隊を組んで帰還の進路を取る。

そこで、天龍は矢矧達にも状況の詳しい説明をして貰うべく同行を要請して、矢矧は艦隊を代表して容認を伝える。

「了解だ、ボイジャー帰ったら覚悟しとけよ。」

「うん？ 僕が何を覚悟するの？」

天龍はボイジャーの命令違反と勝手な行動の事でどんな沙汰が下るかを案じるて忠告を送るが、建造されてから日が浅いボイジャーには何の事だかサッパリで本心から分かっている。

「はあ、帰るぞ皆！」

「はあくい。」

「了解です。」

ボイジャーの惚けた様子を見た天龍は疲労感を覚えながら、帰還の号令を出し帰りの路に付いた。

その頃、鎮守府の執務室に居た紅介にも悪寒が奔り、何やら落ち着かない心持ちで帰りを待っていたのだった。